

第十三節 築地小劇場への上演禁止（第二年六月『ヒルケマン』・『決定』）

大正十四年の六月、創設一周年を迎えた築地小劇場では、青山杉作の演出によりアンドレーエフ作『横っ面をはられる彼』が十四日から上演され、小山内薫の演劇講座も開かれた。鶴見花月園で土方与志をはじめ劇団員の祝賀会が開かれ、白木屋百貨店では模型舞台展覧会を催して、柿落しの『海戦』から上演予定の作品まで、舞台装置の模型四十余を展示した。^①

しかし、二五日より三日間と予告された戦争の悲劇『ヒルケマン』は、検閲の結果取り止めとなり、代用として用意された政治諷刺『決定』も公演を禁止された。治安維持法が制定される政治状況を背景に、築地への取締りが格段に強化されたのである。

築地小劇場一周年と検閲・弾圧の強化（『土方梅子自伝』）

やがて一周年を迎えようとする五月十五日に、与志は国民文芸会から、昨年度のが劇団に最も新しい刺激と感激を与えた人として国民文学賞を受け、築地の人たちもそれに鼓舞され、ますます張り切って一周年

① 浅野時一郎著『私の築地小劇場』一一五―一一六頁。

記念のアンドレーエフ作『横っ面をはられる彼』を上演しました。

しかし、次に非公開の会員制でトルレル作『ヒンケルマン』をとりあげようとして、警視庁から初日直前に上演禁止を命ぜられました。大急ぎで再演の芝居に切りかえたところ、その次に予定したハアゼンクレエフェルの『決定』がまた禁止されてしまいました。

その年は前々年に緊急勅令の形で出されていた治安維持の為にする罰則が、法律として制定、四月に公布され、長い間にわたって言論、表現、政治の自由を奪いとってしまった治安維持法の第一歩が踏み出されたのでした。

表現の自由の上にしか成立しない演劇によって、これは大変厄介な法律でした。従来にもまして、芝居の上演許可をもらうためには、いきどおりを胸におしこめながら警視庁公安課検閲係と何度も交渉しなければなりませんでした。

『ヒンケルマン』、『決定』と上演禁止のつづいたあとで、八月の二日間日比谷の野外音楽堂で催したロマン・ロオランの『狼』には、上演禁止を憤った人たちが大勢つめかけて、何と七千人の観客の声援につつまれました。次の日は生憎の天候で、開幕近くにととうとう雨が降り出しましたが、退場する人は少なく、四千人の人が拍手で迎えてくれたのです。強く降りつづく雨の中で熱演する俳優と、それを熱烈に支持する観客。雨や風の音に負けまいと、いっそう声を張りあげて絶叫する舞台の人と、びしょびしょになっても動かない

観客の心がびったり一つに結ばれ、興奮のるつぼの中で『狼』はもえあがりました。①

築地一周年を祝してまず選ばれた演目は、戦争による悲惨を描いたエルンスト・トルレルの戯曲『ヒルケマン』である。ドイツの労働者たる主人公ヒルケマンは、第一次大戦に招集され、下半身の局部に重傷を蒙った。帰郷した傷病兵は家庭的な不幸を惹き起すとともに、生きる糧を求めて苦難の道を歩む。全三幕にわたる戦争の悲劇は、かなり長大で細密である。全編が上演中止となされた作品は、本稿への引用部分を空色にて明示する。

エルンスト・トルレル作・北村喜八訳『ヒルケマン』悲劇三幕

時代 一九二一年頃 場所 独逸の小さな工場市

第一幕

労働者の住居の台所、それは居間を兼ねている。グレエテ・ヒルケルマンは料理黨で働いている。
(オイゲン) ヒルケマンがはいって来る。卓の側に坐る。・・・

グレエテ お母さんは石炭をくれて？

ヒルケマン (黙っている)

① 『土方梅子自伝』一一九―一二〇頁。

グレエテ オイゲン！訊いてるんじゃないの、お母さんが石炭をくれたかってー何とか返事をしておくれよーまるで部屋にいないでもするように黙りこんでいるーオイゲン、何とか言っておくれよ。・・・

突然高く鳴咽する

グレエテ ああ、神さまーああ、神さまー

ヒルケマン (グレエテを見て、衝動的な怒に駆られて、彼女の方に振り向く) 一体何をー一体何を前前は泣いているんだー返事をしろー何を喚いてるんだ。言え！お前が泣くのは、俺がー俺がお前にー俺がどんな態になったか、世間の奴が知ろうもんなら、あいつらあ、道化者を指さすように、俺を指すからだろう。忌々しい野郎が手柄顔に撃った砲弾が俺を惨めな不具者にーこんな笑いやにしたらだろう。お前、俺と一緒にいるのが恥ずかしいからだろう。さあ、ほんとうの事を言え。ーほんとうの事をー何もかもぐらつくー何もかもぐらつくー俺はどうしたってほんとうの事を知らなきゃならない。(哀願しながら、心から) なぜ、お前は泣くんのだ。

グレエテ あたしーあたし、お前さんを愛しているわー

ヒルケマン 俺を愛しているのか。それともーそれとも、俺の手を手を握る時、同情で慄えるだけなのか。

グレエテ あたしーあたし、お前さんを愛しているわー

第二幕 第四場

労働者相手の小料理店の内部。酒台。その後には、元気で快活な様子の、肥った主婦が控えている。覆いのない木の卓にはお客が座っている。・・・

ヒルケマン 俺はある話をしよう。ーかつてある男がいた。そいつは何も特別な人間じゃない。指導者じゃない。群衆の一人だ。一人の労働者だ。俺の友達だった。俺はそいつが好きだった。その男が二十歳のときに結婚した。女房というのは、工場で知合った女だ。いい夫婦だった。おれはいつでも、あいつら二人を見るのが楽しかった。女房は気立ての優しい女で、男は鋼鉄のように頑丈なー俺よりずっと頑丈な男だったーあいつあ自分の力を自慢していた。

ところが「英雄的な戦争」が勃発して、あいつは招集された。歩兵になったんだ。あいつには子供がなかった。子供をこさえるには、給金が足りなかった。あいつはまだうちにいた頃は、女房を愛していた。それは分り切ったことだ。だが、あいつは戦場へ行っても、女房は以前のままだと信じていた。女房のことを考える毎に、そんなに気持ちよくーそんなに愛らしくーあいつの心は暖かくなった。あいつは何でも女房のことを考えた。そして、ある大きな望みが段々心の中で大きくなって行つた。子供が一人あつたらーいや、二人も三人も、四人も五人もあつたらー坊主や娘っ子がーそうしたら女房はどんないい母親になっていただろう！

大勢の子供のいる労働者の家庭って、実際どんなものか忘れてしまったのだ。俺たちは一週間工場で働いて、日曜には薄汚い活動へ行つて、こさえものの絵を見るんだ。金持の城主が貧民窟から気の毒な娘をひろい上げたりする話や、その他馬鹿げた話なんかを。畜生、一体俺たちはどんな暮しをしているんだ。間に合わせの生活で、生活らしい生活じゃないんだ。機械の生活だ。

そのうちにあいつは、戦争で弾丸にあたつた。故里へ帰してくれる弾丸だと、あいつあそう考えて、すっかり幸福になった。だが、あいつあ帰休が許されなかった。衛戍病院で目を醒ました時、体に触っ

てみた。腹部の繃帯だなあ、とあいつあ考えた。「去勢先生、お目醒めかな。自分でどんな体になったか分つたら、さぞ吃驚するだろうよ。」俺のことを言ってるのかな、とあいつは考えた。どうして去勢先生なんて言うんだろう？あいつはじっと息を殺して不愉快なものを見る時のように、目を閉じた。その夜は眠れなかった。翌朝になって、昨日の訳が分つた。最初にあいつは唸った。一日中唸つたーまるで手負いの猪のように！

①

『ヒルケマン』公演中止の事態に、急ぎ用意されたのは、ハアゼンクレエフェルの戯曲『決定』である。ユダヤ系の独逸人たる彼は、大戦中通訳および購買係として働いた。初期にはいくつかの詩集を公にし、やがてギリシャ劇の改作『アンティゴオネ』で革命的な詩人として登場する。全一幕の『決定』は、革命も反革命も戯画する諷刺劇である。王国において革命が勃発し、王太子と政府は高級ホテルへ避難した。一般人も宿泊する館内で応急の閣議が開かれるさなか、叛徒が侵入して新政府の樹立を宣言する。こうして革命側、反革命側、一般人が入り乱れ、錯綜し錯乱した言動が舞台に繰り広げられる。

ハアゼンクレエフェル作・小山内薫訳『決定』一幕喜劇

① エルンスト・トルレル作・北村喜八訳『ヒルケマン』（『世界戯曲全集第十八巻』近代社、一九二六年。）

四〇一、四〇三、四一八、四二四―四二五頁。

時 今日 場所 あるホテルの前房

序曲 銃声 叫喚

右手および左手に戸口。正面奥に窓。中央に緑の卓。前に喫煙卓。右手空になった瓶の前に、頭を卓の上に載せて一人の男が眠っている。左手に寝巻きを着た「人間」、燕尾服を着た太子レエゲンシュタイン。

太子 政府が転覆したのをあなたは御存じですか。

人間 僕は病氣だった。

太子 銀行が破壊されました。

人間 僕は熱があつた。

太子 町中に暴動が起つています。あの銃声が聞えますか。上ではダンスをしています。下には捕縛された人間がいます。ここは革命の中心です。わたしは三月以来、大臣達が如何に食い、如何に死刑の宣告をするかを観察しました。

人間 僕は革命を寝てしまった。

太子 あの緑のテエブルが見えますか。この建物が占領されると、ここで会議が開かれます。ここには食料があります。この場所は神聖です。階級差別は撤廃されました。人は献立に拠って生きているのです。

人間 太子。

太子 わたしは父の宮殿から寝台を一つここへ運んで来ました。軍務大臣が天蓋の下で眠りたいと言うのです。政府も暴徒も同じようにこのホテルを使おうとしています。町が打ち壊されたのですから、

外に政治を執る場所はないのです。ここにはまだ古い酒の貯蓄があります。どの大臣もどの大臣も即決裁判をする前に、きっとコニヤックを飲むのです。・・・

軍務大臣、法律大臣、教育大臣入り来る。

太子 大臣の会議だ。

軍務大臣 わたしが議長になろう。最初の発言権は法律大臣にある。

一同、緑の卓に向つて坐る。

法律大臣 事態は要求する――

教育大臣 この大きな出来事の前に。

軍務大臣 新聞はどう書いているのだ。

教育大臣 (小声に) 吾々はどこへ向つて進んだら好いのだ。

軍務大臣 吾々の閣僚は反逆に依つて交通を断たれているので、執政権はわたしの手に移ってきている。

わたしは軍務大臣として責任を負担する。

人間 あの本を沢山持っている男は誰だ。

太子 教育大臣です。あの人は文献を調べているのです。

軍務大臣 わたしは民衆に家を離れてはならないと命令する。

法律大臣 捕縛した人間はどうするのですか。

教育大臣　わたしはわたしの改革案を彼等に行かせました。

太子　それは死だ。

軍務大臣　わたしは屋外の集合を禁ずる。武器の携帯を禁ずる。

爆発。

軍務大臣　わたしは戒嚴令を布く。．．．

暴徒等、窓よりながれ入る。

首領　手をあげろ。動くと打ち殺すぞ。

太子　好い調子だ。

首領　政府は転覆した。．．．みんなを拘留する。おれは新しい政府だ。（緑の卓の前に坐る。）紳士方を下へ連れて行け。

大臣達連れ去らる。．．．

人間　ちよつと待つて下さい。

首領　なんだ。

人間　僕は詩人です。僕も聞いて貰いたいことがあります。

首領　君は革命の詩を書き給え。．．．

人間　まあ、外を御覧なさい。死骸があなたの家の前にころがっています。暴力と餓えによってあなたが奪い得た国土は―何者でしたか。あなたはその廢墟の上に何を築きましたか。ある他の世界、しかもそれは前と同じ世界でした。諸君、わたしはこの世界をいつでも見捨てます。あなたの人間

も、あなたの民衆も、あなたの国家も、あなたの法律も、あなた自身も、もはやわたしの要求するものではありません。わたしはあなたの愚劣さを編み込んでいる歴史の外に立っています。①

『ヒルケマン』の上演中止に追い込まれた小山内薫は、代案としてみづから翻訳したハアゼンクレエフェル作『決定』の演出に着手する。この戯曲にも公演禁止の命が下され、稽古半ばの演技陣にも衝撃を与えた。これに抗してシュトラム作『牧場の花嫁』を準備する経緯を、小山内は痛切に記録する。

『決定』の上演禁止（小山内薫「叫びの戯曲」）

この九月に築地小劇場で私は、ハアゼンクレエフェルの『人間』五幕を演出する予定になっている。その予備演習として私は、この七月一日から同じ詩人の『決定』一幕をやることに定めた。

私は先ず『決定』の翻訳を自分でした。．．．俳優達は非常な熱心と興味とを持ってくれた。尤も僅か十五分か二十分で済む芝居だ。飽きる間も疲れる間もなかったろう。私は毎日二、三回宛繰返してやったが、俳優の方はまだ力が余っているようだった。模型舞台を実際の舞台に拡大する為事も吉田君の監督でどしどし進んだ。

① ハアゼンクレエフェル作・小山内薫訳『決定』（『世界戯曲全集第十八巻』近代社、一九二六年。二五七―

役者の稽古もほぼ纏まった。初日はもうもう二、三日に迫っていた。ところへ突然上演禁止の命令がきた。「議論の余地なし」という布達だ。『ヒンケルマン』の場合にはまだ或る条件に依る許可があった。ただその条件が吾々にとってイムポシブルだったから止めたのだ―即ち本質に於いて禁止だったが、形式に於いては禁止でなかった。―しかし、今度のは実にはきりした―気持ちの好い程はつきりした禁止だ。

なぜ禁止されたか。禁止の理由がどこにあるか。禁止する者が正しいか。こんな脚本を出す方が間違っているか。私たちはそんなことを論じている暇はなかった。・・・私達は厭でも芝居を明けなければならなかった。他のふたつはもうすっかり準備が出来ている。『決定』に代わるものを、大急ぎで探さなければならぬ。

私が『決定』を演出題目に選んだのは、内容からではなく、むしろ形式からであった。叫びの戯曲としての『人間』の準備行動に外ならなかった。ところが、その内容が―おそろくそうだろう。形式が官憲に束縛される筈はないのだから―忌憚に触れたのだ。

私はなるべく純粋な叫びの戯曲を要求した。先ず私の頭に浮かんだのはアウグスト・シュトラムであった。そこでこの詩人が遺した七篇の戯曲を、夜に日に徹して繰返し繰返し読んだ。そうして最後に『牧場の花嫁』を採ることに定めた・・・

『決定』の稽古をほとんど完了した俳優達は、その上演禁止を聞いて、どんなに失望したかわからない。既にその直前には『ヒンケルマン』の絶望があった。私は鬱積している俳優達の力に大きな発散孔を作ってやりたいと思った。

私は早速、筆記者を前に置いて『牧場の花嫁』の口訳にかかった。実に急訳にして窮訳である。仕事は二

日にわたったが、費した時間はわずか五時間だ。しかしその翻訳が出来上がった時は六月二十八日で、予定の初日までにはわずか二日しか準備の時間がなかった。そこで経営部に懇願して、やっと初日を（七月）三日に延ばして貰った。

台帳の謄写複製は経営部々員の必死な努力に依って、二十九日の朝までに完了された。その日の午後一時にはもう本読みが行われた。一方私は吉田謙吉君を促して、舞台装置の変形に取りかかった。明快で機敏な吉田君の頭脳は、たちまちこの新しい戯曲の核心を掴んで、とても変形とは思われない程の適確で自由な新しい舞台が、見る間に展開されて行った。

稽古は猛烈に進行した。俳優達は字義通り血みどろになった。こうしてやっと三日の午後七時に、私達は諸君にまみえることが出来たのだ。①

こうした検閲の仕組みと新劇人の苦難について、その二年後小山内はさらに痛切な所感を誌した。築地第四年にあたる当時は、官憲の弾圧が一層強化し、彼の一文は藤森成吉作『犠牲』や北村小松作『猿から貰った柿の種』への受難にも言及するが、ここでは検閲の仕組みと劇団の苦悩を語る前半を転記する。

「初日直前の上演禁止」（『小山内薫演劇論全集第二巻』）

① 「叫びの戯曲」（『小山内薫演劇論全集』第二巻、二六一―二六三頁。）

僕は現代の政治というものに全く絶望し切っている。政治も外交も嘘のつき合いだという気がする。どんなことも信用することが出来ない。……唯、政治の小部分で、絶えず僕等の生活に密接な関係を持っているものが一つある。それは脚本検閲だ。勿論治安維持風紀取締の上から言って、脚本検閲が少なくとも現代の日本に於いては―ある程度の存在理由を持っていることは僕も認める。

だが、脚本は一つの芸術作品だ。単に治安維持風紀取締の上からのみ見られたら、古今東西を通じて世界の傑作戯曲はみんな存在理由を失ってしまうだろう。……役人が芸術が分からないと言って憤慨して見たところで仕方がない。唯、役人として許すことの出来ないのは、彼等が芸術と實際行動とを同一視していることだ。殊に芸術が人心に及ぼす影響の過程結果に就いて、まるで考察も研究もしていないことだ。舞台上狂熱的な一書生が或大臣を暗殺すれば、日本中の書生が大臣暗殺をでも企むように思うのだ。舞台で過激な労働者が或資本家を殺せば、日本中の労働者が日本中の資本家を今にも殺しはしないかと思うのだ。……上演すべき脚本は初日の一週間前から十日前に検閲係の手元まで出すことになっている。そして、吾々は出来得る限りこの既定に従って脚本の提出をしている。それにも拘わらず、初日の直前になって、急に上演禁止の指令が下ることがある。

早くから脚本を提出させるのは問題になって上演禁止にでもなったら、劇場側が困るだろうからという警視庁の親切から出た規定だとばかり私は信じていた。ところが実際について言うと、それは決してそうではないのだ。いつも許可は容易に下りない。上演禁止はいつも初日直前だ。

僕は脚本検閲官がいつも机上にうず高く脚本を積んでいるのを見て、厭な役目もあったものだと同情の念を禁じ得ないのだ。だが、同情は同情。事務は事務だ。もし検閲官の数が足りないなら、もつとどしどし殖やしたらどうだ。劇場は贅沢物視されて苛税を課せられている。その税のたとえ一部を割いても、その位のこととは出来る筈だ。

一体、内務大臣や警視總監は、芝居がどうして出来るかを一寸でも考えたことがあるだろうか。どんな素人が考えても、大道具を作って小道具を調べて、衣裳や髪を作るのに一週間や十日かかることは想像出来るだろう。その上に役者の稽古というものもある。これも理想的に言えば決して一週間や十日で出来るものではない。

さてそれだけの準備が出来たとする。いよいよ初日の蓋をあげようという間際になって、上演禁止の指令が下ったとしたら、劇場の困惑はまあどんなものだと思う。時と金との損害は勿論だ。かりに何か代りの物を作るにしても、とても準備が間に合わない。社会に対しては、もう初日の予告がしてある。一体こういう時、人間はどうしたら好いものか、先ずこれを警視庁に伺いたい。①

文学者トルレルの生涯と作品については、『ヒルケルマン』の上演が予定された大正十二年六月、機関誌『築地小劇場』に解説が掲載された。この一文は翌年若干の加筆を付し、北村喜八の筆名で近代社刊『世界戯曲全集』第十八巻の解題に含められる。

北村喜八「トルレル・生涯・戯曲」(『世界戯曲全集第十八巻』)

トルレルは世界大戦と内乱と革命の、慌だしい血腥い時代と、嵐のように押し寄せた社会主義思想とに育まれた詩人である。・・・十二歳の彼はプロムベルクへ来て、中等実業学校へはいつて七年間在学したが、誤った教育を受け、軍国主義的な訓練を施された。卒業後グレノオブル大學に学び、のち南仏蘭西や北伊太利を放浪した。

一九一四年の七月の末、巴里へいく途中、リヨンに滞在した。・・・八月一日の未明、露西亞に対する独逸の宣戦布告！の号外の叫びが彼の耳のまわりに渦巻いた。―彼は最終列車でリヨンを離れ、途中で幾度も拘禁され、また放免されて非常な危険のあと、仏蘭西の国境閉鎖の前、ようやく瑞西に着いた。そして、ミユンヘンで祖国のために志願兵となった。

彼は十三ヵ月戦場で軍務に服した。彼は国家に対する義務を信じて、殺人、また殺人を行い―ついにプリステルの森で、山と積まれた仏蘭西兵と独逸兵との屍のそばにいる自分を見た。その累々たる屍は、自らを侮辱せる人類に反抗し、盲目な国民達の死の舞踏を悦んでいるように見える運命に反抗して、凄惨な抱擁のうちに、握りしめた拳を高くあげているのであった。

彼は癒やされた。罪を購うた。しかも。彼は罪の重荷を負っている。何故なら彼は殺人者であって、その手は再び浄めることが出来ないのである。

戦傷者として戦場から帰還を許されたので、ミユンヘンで半学期間勉強した。彼は次第に自分というものを見出して来た。彼は時代に対する嫌悪のための心をかき乱され、その時代の出来事を回避しようとする程疲れてはいなかつた彼の血のなかには反逆が燃えて来た。

彼は友を探し求めた。そして「文化会」に加入したが、その老人達の臆病さや無氣力に愛想をつかした。現実の夢想者であつた彼は、怒りながら青年の裏切者であるこの老人達に反抗した。真に革命的な青年そのものを見出そうとする決意は彼の心に熟した。一九一七年の冬彼はハイデルベルクに赴いて、マックス・ウエーバーの客となつて勉強した。彼はこのハイデルベルクで友を見出した。彼は男女の大学生で組織されている団体に招待された。そこで勇氣のある連中を結合して、独逸青年の文化的政治的な聯盟をつくつた。それは純なユウトピア式の社会主義の色彩を帯びたもので、独逸の革命的な青年の団体とが結びついて、戦争を終息せしめ、自分たちの力で世界同胞的な仕事をしようとするものであった。・・・しかし、これは最高軍司令部のかの有名な情報局に睨まれ、この団体に属していた二、三の学生は、何等の尋問もうけずに軍隊に拘引された。奥太利の女学生は国外に放逐され、トルレルは命からがら伯林へ脱れた。

ここでもまた、彼は同志の人々と相知ることができた。彼は独逸の政府がいつまでも戦争を継続するのは、国民を欺くもので、罪悪であると確信するに至つた。彼は戦争の誘因や目的や計画に通曉し、やがてプロレタリアートへの見方となつて行つたのである。一九一八年の一月彼はミユンヘンに来て、軍需品製造のストライキに加わつた。これは戦場にいる欧州の兄弟たちのために戦い、平和を目的とし、さらに覚醒したプロレタリアートの覚醒を目指していた。ストライキの最初の日はクルト・アイスネルが拘禁された。彼は労働者から選ばれて、アイスネルの釈放を申し込んだ。しかし、彼もまた捕えられた。最初の戯曲『転変』は、はじめめた獄室に於て完成されたものである。

十一月革命は再び彼をミュンヘンに導いた。彼は労働者、百姓、兵士の集会の中央委員会の首席に選ばれ、さらにミュンヘン独立社会党の親玉になった。しかし、革命は破れて、彼の首には一万マルクの懸賞金がかけられ、一九一九年六月六月遂に捕縛され、翌七月、五カ年の刑を宣告され、ニイデルシエネンフェルトの要塞監房に幽閉されたのである。この間が所謂スバルタキスの闊将として、彼の最も華々しく活躍した時代である。

スバルタキスというのは、人も知るように独逸に於ける共産党の団体である。そして対戦政策上、独立社会党の一部をなしていた。この独立社会党は中央にマルクス正統派のカウツキを控え、左には急進派のロオザ・ルクセンブルグ、カアル・リイブクネヒト、右には終生派のベルンシュタインを以て組織されていた。スバルタキスは実にこの急進派のルクセンブルグとリイブクネヒトの率いる団体で、ロシア革命後著しくボルシェヴィイズムの傾向を帯び、独逸に労働者と農民と兵士とから成るソヴェイト政府を建設しようと企てたのである。

革命破れてルクセンブルグもリイブクネヒトも反動政府の手によって殺戮された。ミュンヘンで革命を共にしたクルト・アイスネルもまた、反革命軍の手に倒れた。が、トルレルは不思議にも命を完うして獄中に繋がれた。内乱につぐ内乱、目まぐるしいばかりに政権の移動した当時の独逸の、不幸な苦しい時代を、彼は心の奥底までも感じずにはいらなかったのである。

トルレルの戯曲も詩も、すべて戦争と内乱との、この荒々しい時代における、彼の生々しい体験から生み

出された。

①

『ヒルケルマン』の作者エルンスト・トルレル（トラー）が、わが国に紹介されたのは、大正十一年雑誌『解放』八・九月号に発表された黒田礼二訳「変転」によるとされる。「この作は」と同誌十一月号で山岸光宣が解説を添える。「この作は一九一八年革命の勃発するに先立って作られたので、当時政府の忌憚に触れて、上演は勿論のこと、発売まで禁止されたばかりでなしに、社会秩序を紊乱するものとして、著者までも獄に投ぜしめた。」以後トルレルの作品はいくつか邦訳され、そこには獄中第二作『機会破壊者』へ藤井清士訳や詩集『燕の書』への村山知義訳も含まれる。こうした受容をとおして、すでにヨーロッパで確立した彼の名声は、革命の聖なる受難者というイメージで広がった。トルレルは作品自体の価値よりも、むしろ社会的・政治的側面から評価され、この傾向は築地小劇場における扱いにまで及ぶのである。日本におけるトレイル受容を追跡したドイツ文学者河合良三は推論する。『ヒンケルマン』はむしろ社会革命の悲劇的限界を示唆し、どんな社会になろうとも救済されない個人の苦悩、人間存在の悲しみを描こうとした作品なのである。それゆえ『ヒンケルマン』が検閲当局が懸念せねばならない政治的・革命的主張とはもともと無縁な作品であり、決して当局の上演禁止に〈価する〉ようなさくひんでは本来なかったと言えよう。・・・この（築地小劇場の）〈事件〉は明らかに検察当局のトラ

① 北村喜八「トルレル・生涯・戯曲」（『作者小伝及び解題』『世界戯曲全集第十八巻』六一九―六二二頁。

〈参考〉「トルレル自伝」『築地小劇場』大正十一年六月号、五二―五七頁。

ーの経歴・名声に対する過剰な警戒であり、過敏な政治的配慮が働いたものと我我には思えるのである。」①
ゲイリングの作品『海戦』と同じく『ヒンケルマン』について、そこに含まれる国家主義への懷疑と戦争への忌避に官憲が注視したとしても、トルレル自身の活動と生涯が取締りの主要な要素であったことは確かである。築地小劇場においてその後も彼の戯曲、『解放されたウフタン』や『どっこい、おいらが生きている』を企画されながら、上演に至らなかった。一九九七年刊行された島谷謙のトルレル（トラー）研究では、豊富な史料を駆使しつつ、四五年にわたる壮烈な人生が浮彫にされた。革命家として登場するバイエルン時代の政情と活動だけでも、三十頁余にわたるが、叙述の核心を本稿へ抜粋したい。

バイエルン革命と社会主義者トラー（島谷謙著『エルンスト・トラーの生涯と作品』）

第一次大戦の長期化による国民の耐久、疲弊、厭戦感の深まりを背景として、開戦の翌年には暴動が相次ぎ、一九一七年にはドイツ、オーストリの工業都市で大衆ストが起きた。同月のアメリカ参戦により連合国は攻勢に転じ、翌年には軍首脳も敗戦を覚悟するに至った。・・・一九一八年十一月三日、キール軍港で休戦目前の不法な出航命令を拒否した水兵の反乱が起きた。皇帝や軍部が延命する形での「上からの革命」に

① 河合良三「わが国におけるエルンスト・トラー受容の〈謎〉——初期〈大正十一年—十四年〉受容における第一の特質」関西大学独逸文学会編『独逸文学』第三一卷（一九八七年）、五五—五九、六一—六三、七七—七〇頁。

不満な民衆は、ドイツ全土で蜂起した。そして各地に労働者兵士評議会（レーテ）が組織された。いわゆるドイツ革命である。・・・

一九一八年十一月七日、ミュンヘンで社民党と独立社民党によって組織された大衆集会が開かれた。社民党のエアハルト・アウアーが集会後、参加者を解散させたにたいし、独立民主党のアイスナーは参加者と共に市内に駐屯する兵士たちと合流した。不穏な事態の中、国王は亡命し、ヴィッテルスバッハ家は崩壊する。夕方には労兵評議会が成立し、アイスナーを首相とするバイエルン共和国が宣言された。他の地方の評議会とは異なり、農民同盟も評議会に参加した点にバイエルン革命の広がりが見られる。・・・

革命当初、故郷にいたトラーはミュンヘンに赴き、まもなく労農兵評議会（レーテ）中央委員会副議長および独立社民党副議長に任命された。どちらもアイスナーにつぐ地位である。しかし翌一九一九年一月中旬の議会選挙で社会民主党が勝利し、独立社会民主党は敗退する。アイスナーは首相の座を降りることを決意する。二月初め、トラーはスイスのベルンで開かれた第二インターナショナルの大会にバイエルン・レーテの代表として、アイスナーと前後して出席した。・・・大会終了後の二月二一日、帝国主義と戦争犯罪に対するベルン演説によってドイツ反動派の激しい憎悪を呼び起こしたアイスナーは、バイエルン州議会へ向かう途上、二一歳の半ユダヤ系のアルコ・ヴァリ伯によって射殺された。・・・

アイスナー殺害はバイエルン共和国を混乱に陥れた。三月トラーはアイスナーの後任として独立社民党代表に就任する。しかし、バイエルン革命はカリスマを失って内部対立を深め崩壊していった。まず殺害の原因を社民党の責任であるかと思ひ込んだアロイス・ラントナーにより、社民党指導者で内相E・アウアーが狙撃され、州議会は混乱のうちに解散する。ゼネストが呼びかけられ、戒厳令が布告された。労農兵評議会中

央委員会が一時的に政権を掌握するが、社民党との妥協の結果、州議会が招集され、社民党のホフマンを首相とする内閣が三月に成立した。しかし、独立社民党はなおも評議会性を主張してホフマン政権と対立する。四月七日、バイエルン・レーテ（評議会）共和国が宣言され、ホフマン政権はバンベルクへ逃れた。評議会はエルンスト・ニーキシュの後任にトラーを中央評議会議長として選出し、彼は近代ドイツ史上最年少の政権首班となった。レーニンはバイエルンにおける革命の進展を問う電信をモスクワから送った。・・・

五月一日、反革命義勇兵軍が市内に進攻し、評議会政権は崩壊し、バイエルン革命は潰える。各所で白色テロが発生し、一八〇人以上が殺された。・・・トラーは市内を逃走しながらテロの跡を目にする。「死者の前に立って、わたしは戦争について考える。いつの日、ひとは互いに苦しめ合い、迫害し合い、殺し合いをやめるのだろう。」彼はシュヴァービングの知人の家に隠れる。トラー逮捕のために一万マルクの懸賞金付の手配書が各地で配られた。彼は隠れ家を転々とする。

このとき大戦末以来親しくしていた詩人リルケと会うが、彼の家にはすでに搜索も手が伸びていた。リルケはその後もなく騒乱の続くミュンヘンを離れて国外へ去り、二度とドイツには戻らなかった。トラーを最後にかくまったヨハネス・ライヒェルは以前パウル・クレーに学んだ画家である。クレー自身、アイスナール政権下のミュンヘンで芸術家行動委員会に所属し、レーテ共和国崩壊後スイスへ避難した。

六月四日、トラーは密告により逮捕され、軍法会議にかけられた。懸賞金は二〇人以上の情報提供者に分けられた。プロイセン州政府の内相ヴォルフガング・ハイネは国防軍指令官に書簡を送り、トラーを擁護する旨を伝え、作家ロマン・ロランもトラーを擁護する一文を書いた。検察側は三月半ばに成立したホウマン政権による暫定基本法を拠り所として大逆罪を主張した。・・・二五の特別法廷が九カ月で五二三三件の刑

事訴訟を処理し、数千人を有罪とした。独立社民党員で赤軍司令官を勤めたルドルフ・エーゲルホーファーおよび共産党のオイゲン・レヴィネは死刑に処せられた。トラーは大逆罪を犯したが、高潔な動機が考慮され、七年の求刑に対して五年の要塞禁固が言い渡された。・・・

かくして、ドイツ革命に参加した指導者たち、ローザ・ルクセンブルグ、カール・リープクネヒト、K・イスナー、G・ランダウアー、あるいはO・レヴィネらがいずれも殺害された結果、トラーは生き残った数少ない革命指導者のひとりとなる。彼は獄中であって、自身が関与した革命運動に関して繰り返し反省と省察を加えていく。そして獄中で四篇の戯曲と『燕の書』としてまとめられる詩篇等を書き上げる。①

『ヒンケルマン』と『決定』の公演禁止を語る土方梅子の回想でも指摘されるとおり、築地一周年の四カ月前、帝国議会において治安維持法が成立した。二五歳以上すべての男子に選挙権を認める普通選挙法を成就させた高橋高明内閣が、思想・言論の自由を弾圧する立法をも推進したのである。大正十四年二月帝国議会でなされた内務大臣若槻礼次郎の趣旨説明は、これなる法律の意図がヨーロッパにおける革命運動への警戒、無政府主義や社会主義の浸透阻止であることを、明白に示す。治安維持法最初の適用は同年十二月の京都学連事件とされるが、官憲の取締りはその公布とともに格段に強化されていた。

① 島谷謙著『ナチスと最初に闘った劇作家ーエルンスト・トラーの生涯と作品』ミネルヴァ書房、一九九七年。

内務大臣若槻礼次郎「治安維持法案の提案理由」(第五十回帝国議会)

第五十回帝国議会 治安維持法案

治安維持法

第一条 国体若ハ政体ヲ変革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知りテ之ニ加入シタル者ハ十年以下の懲役又ハ禁固ニ処ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二条 前条第一項ノ目的ヲ以テ其ノ目的タル事項の實行ニ関シ協議ヲ為シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ禁固ニ処ス

第三条 第一条第一項ノ目的ヲ以テ其ノ目的タル事項ノ実行ヲ煽動シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ禁固ニ処ス。．．．

大正十四年二月十九日開議

国務大臣若槻礼次郎君登壇

○国務大臣(若槻礼次郎君) 我国に於きまして、無政府主義者、共產主義者其他の者の運動が近年著しく發展を見るに至りまして、殊に露国、独逸の革命に関する情報は一部の者を刺激致しまして、其運動を一

層深刻に導きたるの感があります。続いて其一部の者は外国の同志と通謀し、又は海外より資金を仰ぎ、過激なる運動を計画実行せんとする者があります。運動自体も組織的且つ大規模に行われんとする所の状況に在ります。而して最近各種の社会運動も漸次熾ならんとするの状況に在りますのを奇貨と致して、是等に対して危険なる思想行動を鼓吹し、以て運動を悪化せしめ、又は社会主義的過激運動と提携せしむるよう努めつつあるような次第であります。加之日露の国交も早晚回復を見るに至ることと存じますが、其結果は彼我の来往頻繁となり、過激運動者は各種の機会を得るに至ることであろうと思われます。要するに各種の社会運動は漸を追って旺盛となることであろうと思われるし、此間過激なる思想を有する者が帝国の治安を紊るの目的を以て不穏なる行動に出ずるの傾向は益々増加すべきものと認むるの外ないのであります。然るに是等の行動に対する取締法規としては刑法、治安警察法、新聞紙法、出版法等が存して居りますけれども、其規定が不充分にして、屢々危険なる行動を全く取締り得ざる場合がありますのみならず、其罰則を適用し得る場合と雖も概ね輕きにしまして、罰則を賭して不穏なる行動を敢行せしめるの結果となり、為に取締の実を挙ぐることを得ざるの憾がないではありません。以上の理由に依りまして本法案を立案した次第であります。法案の内容は万世一系の皇室を奉戴して居る帝国のこの国体を変革しようとするような事柄、又明治大帝陛下の大御心に依って創定せられたる、我が立憲政体を変革して、議會否認を為すと云うような事をせんとするような事柄、または私有財産を根本から否認して共產主義を行わんとするが如き、我が国家組織の大綱を破壊せんとするが如き、不法なる結社、その謀議と煽動及叙上の犯罪を醸成すべき目的に出でたる金銭利益の授受を禁じて、現今の過激なる社会的運動中に存する、最も重大なる危険と弊害とを尠からしむると同時に、一般社会を誡め、不穏なる行動に出ずるが如き事を予防せんとするのが、本案の趣旨であ

るのであります。願わくば慎重に御審議の上、本案に御協賛を与えられんことを切に希望致します。①

① 「治安維持法案（政府提出）第一読会」一頁。（『第五十回帝国議会議事速記録』）